

## I シンポジウム後記：新たな門出とともに

極東地域研究センター主催、日本海学推進機構及び人間文化研究機構後援による環日本海学術ネットワーク特定テーマ研究支援事業シンポジウム「SDGs×農業：生物多様性と農法」が2月27日に開催されました。新型コロナウイルスの影響で、インターネット配信によるシンポジウムとなりました。本センターでは、昨年開催したシンポジウムで山本先生がスイッチャーを活用した経験を受け継ぎ、工夫を重ねて、より講演者の顔の表情が伝わる配信にするなど、with コロナ時代らしいイベント開催となりました。写真のように、講演内容に合わせてかわいらしい素敵なポスターも作っていただきました。

シンポジウムでは、“家畜を行動要求満足度の高い生活状態で飼育する”生産システムであるアニマルウェルフェア畜産に造詣が深い日本獣医生命科学大学名誉教授松木洋一先生による基調講演「21世紀農業のあり方を考える：自然共生農業とアニマルウェルフェア畜産」に続き、本センター酒井富夫教授による講演「農法論の変遷と新農業革命」が配信されました。このシンポジウムは、本年度の環日本海学術ネットワーク特定テーマ研究支援事業を締めくくるイベントでしたが、同時に、酒井富夫教授が3月をもって定年退職されるため、酒井先生の最終講義にもあたりました。シンポジウムのテーマに関心を持って頂いた方々だけでなく、酒井先生を慕う方々の参加も得て、参加者は82人にも及びました。コロナ禍のなか、最後は花束とともに、スタッフで囲んで定年退職をお祝いできました。

惜しまれつつ、山本雅資先生、馬欣欣先生も退職されます。三人の門出を祝福しつつ、極東地域研究センターも時代の要請に応じて大きく舵を切るようになります。センターにとっても新たな門出です。次年度は、新たな仲間を迎え入れ、新体制のもと、新たな挑戦が始まります。そのお話しは、また次号にて。



写真左：配信の様子 右：ポスター

(文責：和田直也・堀江典生)

## II 海外研究で学んだ「ある種の距離感」

31年間お世話になった富山大学も、今年度で無事、定年を迎えることができました。そのうち20年間は、極東地域研究センターに所属しました。センターの教員並びに事務スタッフの皆さんには、多くの点で支えていただき心より感謝いたします。

センターを通じて、海外の研究者と交流するようになったのですが、強く印象に残った点があります。それはロシアを訪問した時のことです。東西冷戦時代があり、当たり前といえば当たり前なのですが、国としての独立性、ロシア人としての強い自立性の存在を実感したことです。科学技術面でもそうですし、思考パターンとしてもロシア人が持つ他国とのある種の距離感を感じました。日本(人)は、戦後米国に実質的に依存してきたため、何かにつけ米国を意識しながら意思決定してきました。しかし、国というのは、そうでなくてもいいのだと。ロシア人は、米国の悪いところは悪いと本音で言う。これはよく言われていますが、実際に顔を見て話してみても(私の場合、通訳を通じてですが)、その雰囲気を感じて初めて実感できたのです。こうした精神的自立性は中国でも感じていましたので、強弱の差はあれ日本以外のどこの国でも持っているのでしょうか。

海外研究をする場合、ア prioriに国家間の関係性を意識することがあります。しかし、そこに暮らす人の顔を見ることです。そうすれば、それほど大きな違いは無いことを確認できます。北東アジアの会議によく参加しましたが、アジア系はほとんど顔つきも同じ。会議後の飲み会の場では、みんな同じ顔で笑っていました。そこまでいくと、みんな同じような思いがあるのだなと。

私の専門は農業問題です。訪問先のそれぞれの国にいる研究者の協力を得て、よく現地調査を行いました。他国での知見は、もちろん大いに役立ちました。しかし、海外研究で私がまず学んだ点は、研究の前提として必要な、共有面も含めた「ある種の距離感」だったように思っています。やはり顔を見ての研究スタイルは貴重です。これにより尊敬と批判のスタンスが形成されたのであり、交流も続いたのです。

2/27に開催した「SDGs×農業」シンポジウムでは、農業経済学のなかで議論されてきた農法論がSDGsのなかでどのように位置づけるのだろうかという問題意識があり報告しました。センター設立以来、経済と環境の融合のあり方についてはずいぶん議論してきたものです。今回は、農業問題からの一つの課題設定になったのではないかと考えています。今後、センターの研究がますます発展されることを祈念しております。(文責：酒井富夫)

### III Sign-off Message

私が富山大学極東地域研究センターに着任したのは2008年10月1日でした。あっという間に12年が過ぎたと感じています。着任初日の午後センターの教員会議があったことは今でもはっきりと覚えています。なぜなら、その日の議題の一つが極東地域研究センターが潰されそうだから、それにどう対処すべきか、というものだったからです。「大変なところに来てしまったのかな」というのが正直な初日の感想でした。今になって思い返してみれば、国立大学の法人化による改革が極東地域研究センターに及んだ最初の一歩だったように思います。

細かな変更はありましたが、12年経った今もなお極東地域研究センターは健在です。ただ、わずか6人（現在は5人）の研究センターという小船が国立大学法人の改革という学内の荒波を乗り切るのとは簡単なことではなく、一人一人が危機感を持って日々の仕事に臨んできた結果だと自負しています。

おかしな議論だなと思いつつも「学部の教員も研究はしているのだから、研究センターの存在意義はセンター内での共同研究があることだ」というプレッシャーを大学執行部より受けたこともありましたが、これによって、構成員全員が自分のやりたい研究とは別にもう一つの研究の顔を持つことになりました。社会貢献や外部資金の獲得も「研究センターとしては当然」というプレッシャーもあり、直近では大学から当センターに配分される予算の2倍の研究費を外部から獲得するようになりました。こうしたプロジェクトを通じて多くの若手研究者を迎えて研究交流が出来、彼女たちの旅立ちを後押しできたことは教育機能を持たないセンターとしては感慨深い思い出です。これらはいずれも少しずつ少しずつ一人一人が時代の流れを感じながら守備範囲を広げて努力してきた結果だと思います。

こうした自由で前向きな極東地域研究センターの雰囲気を作り上げてくださったセンターの皆様には本当に感謝しています。自分自身としてもこの12年間で大学院生の頃にはとてもできると思わなかった多くの成果を出すことができたと思っています。これも、今村弘子元センター長（現富山大学名誉教授）をはじめとするセンターの皆様のご心温まるご支援があったものだったとあらためて感じております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、研究活動が活発になり、外部との関係が深まるにつれ複雑になる一方の事務作業を支えてくださった事務職員、事務補佐員、研究支援員の皆様にも本当に世話になりました。どうもありがとうございました。

昨年来のコロナ禍で時代はまた大きく変化していく気配です。極東地域研究センターは21世紀最初の20年の役割を終えて、これから新しい道を歩んでいくことになりそうです。月並みですが「Stay hungry, Stay foolish」の気持ちを忘れずに私自身も新天地にて頑張りたいと思います。12年間本当にありがとうございました。

（文責：山本雅資）

### IV 感謝の意と今後の連携

一橋大学経済研究所から富山大学極東地域研究センターに転職し、あっという間の二年がたちました。今年4月に法政大学経済学部へ転職する予定ですが、富山大学で研究生活を送ったことは、とても良い思い出になりました。和田直也先生、堀江典生先生をはじめ、富山大学の皆様にご心より感謝の意を申し上げたいと思います。

振り返って考えると、この二年間は、ほぼ毎日学問の道で走っていて非常に充実した日々でした。経済学部労働経済学の講義および大学院中国経済論特殊研究・演習を担当させていただきました。学部生と大学院生に触れ合えて、面白いディスカッションができてとても楽しかったです。日本海学講義では、中国経済発展と環境政策について講義を行い、経済学部以外の理学部、工学部の学生達は中国経済のことに興味を持つことになるようで大変嬉しく思っております。また、講師として、富山大学が企画した特別公開オンラインセミナー（計28回）に参加し、「コロナショックと中国経済への影響を探る」について講義を行い、富山市民と交流する貴重な経験をもらえて非常に感謝します。

教育活動を行うと同時に、中国経済に関する実証研究を進めました。研究振興課の皆様にご協力・ご助言いただき、研究代表者として、令和2-4年度科研費基盤研究B（「中国社会保障政策の経済分析—ミクロデータに基づく実証研究」）が採択され、現在この研究プロジェクトに取り組んでいます。学術ジャーナルの投稿論文が公刊されると同時に、国際共同研究も積極的に進め、中国、韓国、日本の優秀な学者達と連携し、東アジアの高齢化と社会保障の実証研究の成果として、今年4月と7月、下記の2冊の欧文図書はSpringer Nature、Palgrave Macmillanより公刊される予定です。



今後、ミクロデータを構築し、中国を含む東アジアの所得格差と社会保障に関する実証研究をさらに進め、富山大学SDGsプロジェクトにも貢献したいと思っています。また、現在も、堀江典生先生と一緒に一橋大学の文部科学省共同利用・共同研究プロジェクトに参加しております。今後、中国・ロシアの労働市場のメタ分析について、堀江典生先生と連携し、一橋大学、法政大学と富山大学の共同研究プロジェクトを立ち上げたいと考えております。今後、皆様のご恩情とご温情を思いつつ、学問の道で邁進してまいります。さよならの代わりに！

（文責：馬欣欣）